

第1章 対象地区の概要

1 厚木市の概要

(1) 市勢の状況

【概要】

- ・本市は、神奈川県の中東部に位置し、面積 93.83 平方キロメートル、人口 225,242 人（平成 22 年 4 月 1 日現在）の都市です。

【歴史】

- ・江戸時代には、徳川氏の旗本領、大名領及び幕府直轄領が配され、宿場町、産業、生産の場として発達し、小江戸と呼ばれました。
- ・大正 12 年の関東大震災による大被害から復興し、昭和 31 年 9 月に現在の厚木市となりました。
- ・昭和 50 年代後半より、森の里を中心とした研究開発型企業の立地や業務・サービス等の産業も集積し、多機能を有する都市として成長してきました。

【地勢】

- ・西北から東南に緩やかに傾斜し、西部及び西北部は山岳地帯で複数の小山脈が南北に走り、西部においては大山がそびえ丹沢山塊へと連なっています。
- ・市の東部は富士五湖の一つである山中湖に源を発する相模川が南北に貫通し、これに併走する中津川や小鮎川等の河川の流域に平野が開けています。

【交通】

- ・昭和 2 年に小田急線が開通し、現在では、東京新宿まで急行で約 50 分、横浜まで相模鉄道で約 40 分の距離にあります。
- ・また、東名高速道路を始めとして、国道 246 号、129 号、412 号、小田原厚木道路等が整備され、交通の要衝としての地理的条件にも恵まれています。

【都市整備】

- ・本市は、業務核都市として首都圏機能の一翼を担うことが求められており、さがみ縦貫道路（首都圏中央連絡自動車道）を始めとする 3 本の高規格幹線道路の整備が進められています。
- ・これまでの都市機能の集積を生かして、新たな時代を展望した厚木らしさの創造に向け、対岸の海老名市や相模原市とも連携を図りながら自然環境と調和したまちづくりを推進しています。

本市における高規格幹線道路等の整備計画

資料：「第 9 次厚木市総合計画」（平成 21 年 3 月 厚木市）

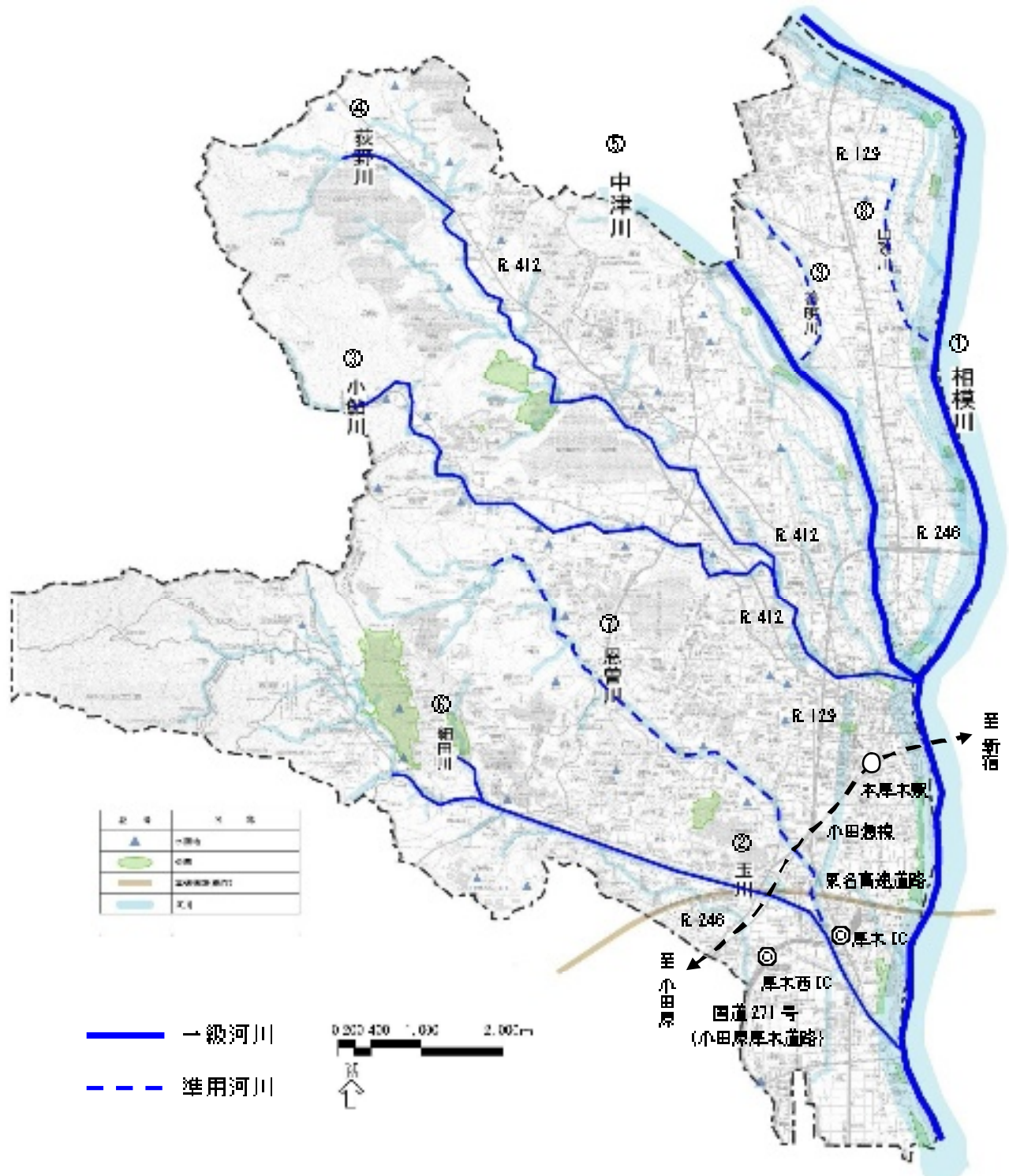


(2) 市内河川の状況

【概要】

- ・ 市内には、相模川水系の9本の河川が流れており、神奈川県が管理する6本の一級河川（①相模川、②玉川、③小鮎川、④荻野川、⑤中津川、⑥細田川）と市が管理する3本の準用河川（⑦恩曾川、⑧山際川、⑨善明川）からなっています。

厚木市内の一級河川及び準用河川



【流路延長】

- ・ 9本の河川全体の流路延長は、県下でL=131.7km、市内でL=63.3kmとなっています。
- ・ 市内において最も流路延長が長い河川は、相模川のL=16.4kmで、小鮎川のL=10.0kmが次いでおり、その他の河川はL=10km未満となっています。

市内河川の流路延長

資料：「厚木市統計書」

河川	区分	管理者	流路総延長（km）	
			県下	市内
相模川水系	—	—	131.7	63.3
① 相模川	一級河川	神奈川県	55.6	16.4
② 玉川	〃	〃	8.0	8.0
③ 小鮎川	〃	〃	13.8	10.0
④ 荻野川	〃	〃	8.9	8.9
⑤ 中津川	〃	〃	32.8	7.4
⑥ 細田川	〃	〃	1.0	1.0
⑦ 恩曾川	準用河川	厚木市	7.2	7.2
⑧ 山際川	〃	〃	2.0	2.0
⑨ 善明川	〃	〃	2.4	2.4

【① 相模川】 ※）11～14頁参照。

【② 玉川】

- ・ 大山東麓付近に水源を発し、七沢川と日向川が合流して玉川となり、準用河川恩曾川と合流して相模川に注いでいる県内では中規模の河川です。
- ・ もともと平塚市内を流れる花水川の支流でしたが、幾度となく氾濫が起きたため、昭和16年に河川改修が行われ、現在の玉川になりました。

【③ 小鮎川】

- ・ 三峰山、辺室山付近に水源を発し、市内の林地内で荻野川と合流して相模川に注いでいる県内では中規模の河川です。
- ・ 小鮎川は、昔から多くの鮎が棲むきれいな川であり、農業用水や生活用水、材木を運ぶ水路として活用されていました。
- ・ 大正元年には厚木初の水力発電所が設置され、大正14年以降廃止されました。

【④ 荻野川】

- ・ 厚木市と清川村境の経ヶ岳付近に水源を発し、柄沢川、真弓川が合流し、林地内で小鮎川と合流して相模川へ注いでいる県内では小規模な河川です。
- ・ 沢や谷に挟まれ、その数99谷戸（昔の沢や谷を数える単位）と言われるほどに

険しい地域を流れる川でした。

- ・ 萩野川からは砂鉄が取れ、砂鉄を溶かす木材も豊富にあったため、古来より鋳物が盛んで、当時の鐘が妻田薬師や中津八音神社等に残っています。

【⑤ 中津川】

- ・ 丹沢山塊、ヤビツ峠付近に水源を発し、早戸川と合流、宮ヶ瀬ダムを経て、市内の金田付近で相模川に合流している相模川水系最大の支流です。
- ・ 厚木の地名の由来が木材を集める“アツメギ”の意味であるとも言われるように、昔は中津川も半原・宮ヶ瀬方面から筏で木材が運ばれており、古くから物流の集積地であった厚木の重要な川でした。
- ・ 現在は、坂本、才戸、牛久保、昭和用水等4箇所の堰があり、1,000ha以上の相模平野の水田を潤す役割を担っています。

【⑥ 細田川】

- ・ 森の里が開発される以前は、開発区域中央の谷を流れる普通河川でしたが、開発の造成上付け替えが必要となり、公共下水道事業として整備され、一級河川に承認されました。小野地内で玉川に合流しています。
- ・ 森の里地区の開発に伴う雨水の流出量の増加で、細田川と一級河川・玉川下流域に影響を与えないよう細田川防災調整池が設けられています。下流農地への農業用水としても利用できるよう約7,000立方メートル（ドラム缶約35,000本分）が貯留されています。

【⑦ 恩曾川】

- ・ 上古沢盆地に源を発し、東名高速道路厚木インターチェンジ付近で玉川と合流する河川です。
- ・ 高坪橋下流と地蔵橋下流には、川と親しめる空間として親水広場がそれぞれ整備されています。

【⑧ 山際川】

- ・ 中津原台地東側の裾野に源を発し、関口地内で相模川に合流する河川です。
- ・ 最上流部には、山際親水広場が整備されています。

【⑨ 善明川】

- ・ 中津原台地西側の裾野に源を発し、長坂地区で中津川に合流する河川です。
- ・ 中流部には下川入善明川の水辺が、下流部には長坂山ノ根水辺の広場がそれぞれ整備されています。

2 相模川・三川合流点地区の概況

(1) 相模川

【概要】

- ・ 神奈川県中央部を流れる相模川は、富士山北東麓の山中湖や忍野八海の富士山伏流水の湧水池を水源とし、平塚市で相模湾に注ぐ長さ113km、流域面積1,680平方キロメートルの河川です。
- ・ 相模川水系は、国土交通省が指定した全国109の一級水系の一つで、104の河川が一級河川に指定されています。流路延長が20km以上の河川としては、道志川、中津川、鶴川、葛野川、秋山川、小鮎川、玉川があります。
- ・ 相模川は、山梨県内では桂川、河口付近では馬入川とも呼ばれ、鮎の生息数が多いことから古くは鮎川と呼ばれていました。

相模川水系と尾根 出典：「相模川流域誌」



相模川の現状（斜写真） 出典：「相模川流域誌」

●現在の相模川（斜写真）



写真 17 15.0K 付近



写真 18 15.0K 付近

【歴史】

《江戸時代／厚木は舟運の基地》

- ・ 相模川河口より全国の物産が集まり、内陸部から材木、薪炭、年貢米等の物資が相模川を下り、海路江戸（東京）へ運航する等、厚木は相模川舟運の基地として栄えました。

《明治～大正時代／東海道本線開通に伴う舟運衰退》

- ・ 明治22年（1889）、東海道本線の全線開通により物資の貨車輸送が開始され、厚木は衰退の危機にさらされる一方、東海道線の停車場ができた平塚は、大山参詣の玄関口として賑わうことになりました。

《大正～昭和時代／屋形船の運航》

- ・ 厚木は先地回復策として、厚木名産の鮎を目玉とした鮎漁遊覧会を開催し、横浜・東京方面からの客を接待する花柳界の充実を進めました。
- ・ 平塚駅から鮎漁客を人力車や馬車で厚木まで運び、屋形船に芸者を伴って鮎漁を楽しみながら平塚まで下る企画は人気を博し、しだいに多くの人々が厚木を訪れるようになりました。

鮎つり船と相模川
（大正初期）
出典：ホームページ
「橋と鮎の相模川」



《昭和初期》

- ・ 昭和2年（1927）に小田急線が開通、本厚木駅から座間市四ツ谷の座架依橋の少し下流部まで顧客をバスで移送し、屋形船で相模川を下ようになりました。
- ・ 当時、隅田川での屋形船等はなく、相模川での船遊びは芸者を伴う大臣クラスの遊びで鮎の掴み取りもでき、小田急で多くのお客が集まりました。
- ・ 当時、船宿は12～13店あり、各宿4隻程度を所有しており、下船してから宿屋（東町等）で2次会をしていました。

《昭和30年代》

- ・ 小田急線橋梁部の河川下構造物を保護するために昭和30年代に厚木床止めが整備され、屋形船は床止めより下流に下ることができなくなりました。

厚木床止め



《現状》

- ・ 隅田川や江戸川での屋形船の運航、東京ディズニーランドやお台場と組み合わせた運航等の影響を受け、相模川での屋形船は利用者が減少していきました。
- ・ 現在、稼働しているのは1隻で手入れをすると動かせる屋形船を含めると10隻が残されています。

屋形船の現状（左：稼働中、右：休止中）



- ・ 運航時期は、6月から鮎が禁漁になる10月までとなっています。
- ・ 1隻当り2～3人の船頭が必要ですが、船頭の高齢化や人数不足、後継者の育成が課題となっています。

《屋形船と鮎との関係について》

- ・ 鮎の鶺鴒（うなわ）漁は、麻縄に鶺鴒又はカラスの羽を付け、鮎を一定方向に導き集め、投網で漁獲する方法で昭和30年代前半まで行われていましたが、現在は全国的に禁止されています。
- ・ 相模川漁業協同組合では、三川合流地点の投網を禁止していますが、放流する観光鶺鴒漁であれば実施の可能性はあると考えられます。

実際の鶺鴒

（厚木市観光協会副会長栗原氏所有）

※）麻縄にカラスの羽が付いている。



(2) 三川合流点地区

【概況】

- ・本市の多くの河川が集まる三川合流点地区は、本厚木駅周辺の中心市街地に近く、多くの人々が利用しているエリアです。
- ・合流点北側には、厚木無線中継局（厚木パノラマタワー）が設置され、非常によい眺望となっており、あゆみ橋、相模大橋、小田急線橋梁は、独特な河川景観を形成しています。
- ・当地区の河川敷には広場や運動施設が多く分布し、地域住民の日常のレクリエーション等の場となっているほか、あつき鮎まつり大花火大会や相模川クリーンキャンペーン等各種行事のイベント会場としても利用され、多くの人でにぎわいを見せています。
- ・また、平成22年9月には、B級ご当地グルメの祭典「B-1グランプリ in 厚木」が開催され、当地区の市営厚木野球場周辺が第2会場となり、第1会場（イトーヨーカドー駐車場）と併せ2日間で約49万5000人の来場者がありました。

三川合流点地区の状況（1/3）

②-1 野球場(緊急時の防災ヘリポート)、テニスコート等のスポーツ施設が立地

① 市街地への眺望が広がる合流地点

⑤-1 礫地が広がる三川合流点部

②-2 新築地の中ではもっとも開けた場所である

⑤-2 あゆみ橋下流部には広い河川敷がある

③-1 狭い河川敷

④-1 河川敷は広いが草木が生い茂る

③-2 舟が係留されている

④-2 絵が描かれている護岸ブロック

0 250 500 1000 m

三川合流点地区の状況 (2/3)



厚木パノラマタワー



厚木パノラマタワーより南側、三川合流点を臨む



あゆみ橋①



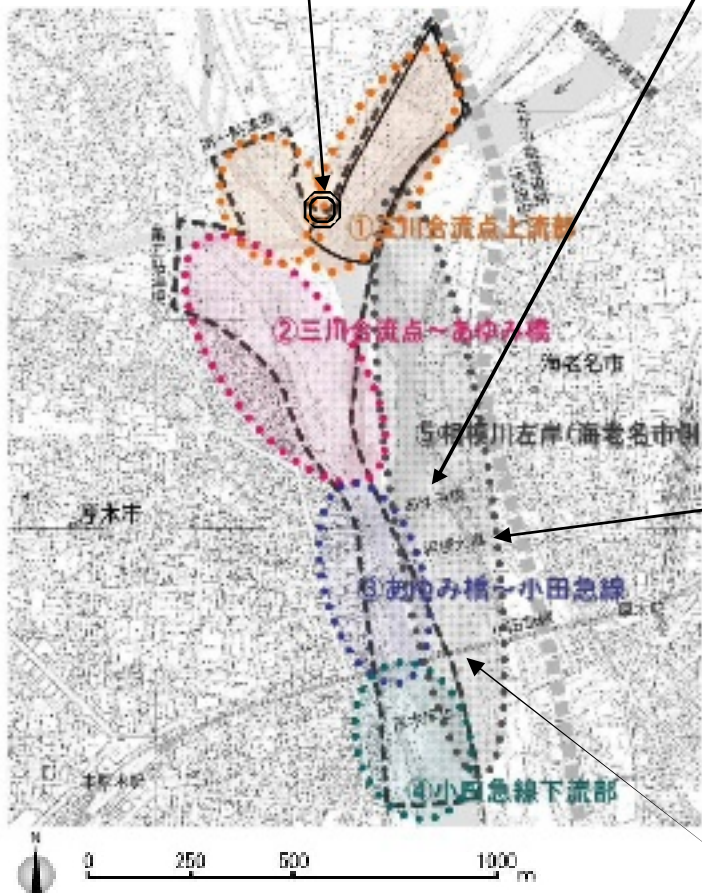
あゆみ橋②



相模大橋



小田急線橋梁



三川合流点地区の状況（3/3）

《鮎のつかみどり》



《相模川クリーンキャンペーン》



《大花火大会》



《B-1グランプリの開催状況》



【動植物・水質の状況】

- ・ 「平成20年度 河川モニタリング調査に係る相模川水系水質調査（平成21年3月 神奈川県）」（※）によると、第一鮎津橋・第二鮎津橋周辺では、『ハグロトンボ』（底生動物）、『アブラハヤ、シマドジョウ』（魚類）、『カワヂシャ』（植物）の重要種を始めとして、「ゴサギ、カルガモ」（鳥類）等が生息しています。
- ・ 2つの橋周辺ともに水質はアルカリ性で、水中の有機物や浮遊粒等は、鮎が生育できる状況となっています。

※）県の「かながわ水源環境保全・再生実行5か年計画」による水環境モニタリング調査として、相模川水系を対象に動物、鳥類、水生植物等の調査が実施されたものです。

第一鮎津橋・第二鮎津橋周辺における動植物調査結果の整理

区分	出現種	種別			備考	
		在来種	重要種	外来種		
底生動物	171	166	1	5	0	底生動物重要種：ハグロトンボ 魚類重要種：ウナギ、コイ、アブラハヤ、ウグイ、カマツカ、ニゴイ、シマドジョウ、ナマス、メダカ、ボウズハゼ、スミウキゴリ、オオヨシノボリ 重要種：カワヂシャ 特定外来生物：アレチウリ、オオキンケイギク
魚類	24	23	12	1	0	
鳥類	12	12	0	0	0	
付着藻類	63	63	0	0	0	
植物	196	121	1	75	2	

底生動物（重要種）		魚類（重要種）	
ハグロトンボ	ウナギ	コイ	アブラハヤ
			
魚類（重要種）			
ウグイ	カマツカ	ニゴイ	シマドジョウ
			
魚類（重要種）			
ナマス	メダカ	ボウズハゼ	スミウキゴリ
			
魚類（重要種）		植物（重要種）	鳥類（例示）
オオヨシノボリ		カワヂシャ	ゴサギ
			
			カルガモ
			

第一鮎津橋・第二鮎津橋周辺における水質調査結果の整理

(調査年月日：平成21年3月5日)

地区番号	地区番名	気温	水温	採取水深	透視度	pH	BOD (mg/L)	COD (mg/L)	SS (mg/L)	DO (mg/L)
St.17	第一鮎津橋	13.2	11.6	0.16	100	7.7	0.6	1.2	2	10.8
St.28	第二鮎津橋	13.4	14.1	0.08	89	8.1	1.6	2.3	7	10.3

pH 0<pH<7が酸性、pH7が中性、7<pH<14がアルカリ性。人体のpHは7.2で酸性雨とはPH5.6以下をいう。酸性雨になると樹木が枯れ、水中では魚が住めなくなる。

BOD 生物的化学酸素要求量。水中の有機物量の指標となる項目。人為的な汚濁の無い溪流と呼ばれる場所では概ね1 mg/リットル以下。水産用水基準；サケマスアユについて、河川における自然繁殖の条件としてBOD 2mg/リットル以下、生育の条件としてBOD 3mg/リットル以下。

COD 一般に河川の汚染を表す指標。ヤマメ、イワナはCOD 1mg/リットル以下に住み、コイ、フナは5mg/リットルでも住める。

SS 水中に浮遊する“粒”の量を、単位あたりで示す指標。SS>25mg/リットルで河川AA類型に属する。水産1級；ヤマメ、イワナ等貧腐水性水域の水産生物用ならびにそれより腐水性に近い水域の水産生物に適応している。

DO 溶存酸素。通常7～14mg/リットルの酸素が水に溶けており、水質汚濁程度の指標で、環境水質基準値では5mg/リットル以上。2mg/リットル以下では悪臭がする。

水質調査地点図

